

ご退職する三先生を送る

国際関係学部長 新井敬夫

昨秋（令和3年）、本学部は開設30周年記念行事をオンラインで実施した。本来は、もっと前に実施予定であったが、コロナ禍で延期となっていた。当日、行事を実施した大学の部屋には感染防止のため限られた先生方だけが集合した。その行事の後記念撮影を行ったのだが、研究・教育生活の時間を学部30年の歴史とともに歩まれた3先生には、充実感とともに一抹の寂しさも漂っているように見えた。

栗原孝先生、中野達司先生、新妻仁一先生（五十音順）が、令和4（2022）年3月31日をもって定年退職する。先生方の学部に対するご尽力、ご貢献には多大なものがあり、後輩としてまた学部長として深く感謝しつつ送別の辞を記したい。

* * *

栗原先生は一橋大学大学院を経て、昭和59（1984）年4月に経済学部講師として本学に赴任された。先生のご専門は社会学で、私が赴任した平成7（1995年）ころには日韓若者の国際比較が主たる研究テーマであったと記憶している。またその後に書籍『情報文化と生活世界』（1998、共著）をいただいた。先生の研究の出発点はドイツの社会学者ハーバーマスであり、そこからコミュニケーション、情報化、グローバル化などをキーワードに国際社

会と日本社会、そして若者の意識を探求し、教育に還元してきた。また、社会学者らしく、物事を多方面から（あるいは場合によっては斜めから）眺めることも印象的であった。このような視野の広さがあったからこそ、狭い意味での学部教育に留まることなく、大学全体の財産でもある「アジア夢カレッジ」の牽引者、そして「グローバル人材育成推進事業（文科省プロジェクト）」採択の立役者ともなり、教務委員長、副学長としての責務を果たしえたのであろう。

いつだっただろう、趣味は何ですか、とうかがったことがある。写真だ、というのでどのような写真ですか、とさらに問うと「廃墟」だという。まだ、この写真を拝見したことがない。いつか、ぜひ廃墟だけでなく、私からは思いもよらないシーン、アングルの写真を拝見したい。

中野先生は、東京外国語大学大学院を経て、昭和63（1988）年本学教養部に着任された。平成2（1990）年、国際関係学部設置とともに本学部のスタッフとなった。ご専門はスペイン語、中南米地域研究であり、とりわけメキシコには造詣が深い。ご著書『メキシコの悲哀——大国の横暴の翳に』（2010年）を始まったばかりの「AUAP-ASU、SDSU（亜細亜大学アメリカプログラム、アリゾナ州立大学、サンディエゴ州立大学）」派遣学生に読んでもらったことがある。大国アメリカに翻弄されるメキシコに向けるまなざしは、学問をはなれて、先生が弱者あるいは周縁化した対象に向ける優しいシンパシーのように感じられる。もう一つの顔がある。先生は授業「体験で学ぶ地球環境論」で、富士山の清掃、井の頭公園での外来生物駆除活動などに学生を引率し、自然と環境に関する教育にも力を注いだ。先生は野外でのゼミも好まれた。私も一度キャンパスの東屋で「開講」されたゼミに飛び入り参加したことがある。

自然環境保護への啓発、野外での学習……これもまた現代社会では周縁に追いやられそうな対象への優しいまなざしの表れかもしれない。入試委員長としての多大な貢献は、学部にとどまらず全学におよんだことも付言しておこう。

新妻先生はシリアのダマスカス大学を経て、平成元（1989）年、教養部講師として本学に着任された。その後、平成2（1990）年に国際関係学部講師になっておられる。先生の専攻はアラビア語、中東地域研究である。『アラビア語講座 初歩からのアル・アラビーヤ』、『アラビア語文法ハンドブック』などのアラビア語関係のご著書に加え、「シリアからみたレバノン』『中東研究』（No.313）1987年などの中東研究関連の著作も多い。書名からもわかるように、先生は日本におけるアラビア語教育・研究の第一人者と言っても過言ではない。ただ、マスメディアを通じたアラビア研究者のイメージ（あくまでもステレオタイプのイメージだが）とはだいぶ異なる。

私は、鬼怒川温泉で4月に行われる新入生オリエンテーション「出会いの広場」で先生と同室となったことがあった（2、3回と記憶している）。畳の部屋だったので、並んで寝たわけである。先生は物腰が柔和で、また話し方が穏やかで、本当に「（私が学生だったら）いい先生だなあ」という印象を持ったことを憶えている。しかし、もっと印象に残っていることがある。私が輪番で担当した授業に招聘した外務省からの講師の「先生」が新妻先生で、彼が「新妻先生にはお世話になりました」と語っていたことだ。先生は外務省でアラビア語関係の講師を務められたが、その時の「生徒」が外務官僚だったわけである。先生の専門分野での貢献は大学教育をはるかに超えていた。

* * *

三先生はそれぞれのご専門、そしてお立場で、研究・教育・組織運営にかかわってこられた。30年に及ぶ学部の歴史を担い、そして記憶する先生方とお別れすることは忍びない。時の流れは残酷である。

今後もご健康にご留意の上、ますますご活躍ください、と申し上げるとともに、存分に人生を謳歌してください、との言葉も送りたい。長年にわたり、ありがとうございました。